

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一

ある日のことでございます。お釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちを、独りでぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色（注）すいの蕊（注）すいからは、何ともいえない好い匂においが、絶え間なくあたりへ溢あふれております。極楽はちょうど朝なのでございましょう。

やがてお釈迦様はその池のふちにお佇たたずみになつて、水の面を蔽おほっている蓮の葉の間から、ふと下の容よう子すを御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、ちょうど地獄の底に当たつておりますから、水晶のような水を透すき徹とおして、三途さんずの河や針の山の景色が、ちょうど覗のぞき眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多かんだたという男が一人、ほかの罪人といっしょに蠢うごめいている姿が、お眼めに止まりました。この犍陀多という男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊おおどろぼうでございしますが、それでもたった一つ、善いことをいたした覚えがございします。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛くもが一匹、路みちばたを這はつて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうといたしましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命をむやみにとるということは、いくら何でも可哀かわいそうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます。

お釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けたことがあるのを思い出しになりました。そうしてそれだけの善いことをした報いには、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。幸い、そばを見ますと、翡翠ひすいのような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけております。お釈迦様はその蜘蛛の糸をそつとお手にお取りになつて、玉のような白蓮の間から、遙はるか下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお

下ろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人といっしょに、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくらやみからぼんやり浮き上がっているものがあると思いますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらございません。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞こえるものといつては、ただ罪人がつく微かな嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責め苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございましょう。ですからさすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかりおりました。

ところがある時のことでございます。何気なく犍陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めると、そのひっそりとしたやみの中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、すると自分の上へ垂れて参るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍って喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと、極楽へはいることさえもできましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございません。

こう思いましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことでございますから、こういうことには昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦つてみたところで、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼるうちに、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなってしまうました。そこ

で仕方がございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下がりながら、遙かに目の下を見下ろしました。

すると、一生懸命にのぼったかいがあつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもうやみの底にいつの間にかかくれております。それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になつてしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかもしれません。犍陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻ありの行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしておりました。自分一人でさえ断きれそうなの、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪えることができましょう。もし万一途中で断れたといたしましたら、せっかくここへまでのぼって来たこの肝腎かんじんな自分までも、元の地獄へ逆落としに落ちてしまわなければなりません。そんなことがあつたら、大変でございます。が、そういううちにも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上がって、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せっせとのぼって参ります。今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。

そこで犍陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己おれのものだぞ。お前たちは一体だれに尋きいて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚わめきました。

その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっている所から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから、犍陀多もたまりません。あつという間もなく風を切つて、独楽こまのようにくるくるまわりながら、見る見るうちにやみの底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでござい
す。

お釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしましますと、悲しそうな顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、お釈迦様のお目から見ると、浅ましくおぼしめされたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんなことには頓着(注2) とんじやくいたしません。その玉のような白い花は、お釈迦様の御足(おみあし)のまわりに、ゆらゆら(注3) うてな萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何ともいえない好い匂いが、絶え間なくあたりへ溢れております。極楽ももう午(ひる)に近くなつたのでございましょう。

(芥川龍之介「蜘蛛の糸」による。)

(注1) 蕊＝種子植物の生殖器官。おしべやめしべの総称。

(注2) 頓着＝深く心に掛けること。気にすること。

(注3) 萼＝花のがく。

— この文章の内容や表現について説明する場合、どのように説明したらよいですか。次の1から4のうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

1 地獄にいた犍陀多は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、お釈迦様が極楽から垂らした細い蜘蛛の糸をよじのぼって、無事に地獄から抜け出すことができます。このような内容が、現在、過去、未来の表現を複雑にからませ、時間的な広がりをもつように書かれています。

2 地獄にいた犍陀多は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、お釈迦様が救い出そうとしたにもかかわらず、自分だけ抜け出そうとしたため、再び地獄に落ちます。このような内容が、敬体を主としていねいな文末表現で、読者に語りかけるように書かれています。

3 お釈迦様は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、地獄にいた犍陀多を救い出そうとしますが、犍陀多が優柔不断であつたため失敗します。このような内容が、作品全体にわたって、お釈迦様の目を通して見ているように書かれています。

4 お釈迦様は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、地獄にいた犍陀多を何とかして救い出そうと懸命に働きかけます。このような内容が、お釈迦様の悲しみと苦しみを際立^{きわ}たせるように、視覚や聴覚などに訴^ひえる豊かな比喩^{ひゆ}を用いて書かれています。

二 次は、「二」の場面の一部です。この部分を朗読する場合の工夫について、あとの問いに答えなさい。（①から⑥は、文の番号を表す。）

①すると、一生懸命にのぼったかいがあつて、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもうやみの底にいつの間にかかくれております。

②それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になってしまいました。

③この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかもしれません。

④健陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。

⑤ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。

⑥健陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしております。

ア この部分を、話の展開に沿って大きく二つに分けるとすれば、どこで分けますか。次の1から5のうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 ①と②の間で分ける。
- 2 ②と③の間で分ける。
- 3 ③と④の間で分ける。
- 4 ④と⑤の間で分ける。
- 5 ⑤と⑥の間で分ける。

イ アで答えたところで二つに分けて朗読する場合、前と後ろとをどのように読み分けますか。次の1から4のうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 前は、不安を感じている様子が表れるように読み、後ろは、次第に不安が解消される様子が表れるように読む。
- 2 前は、不安を感じている様子が表れるように読み、後ろは、その不安が急に増大する様子が表れるように読む。
- 3 前は、希望をもっている様子が表れるように読み、後ろは、予想外の展開に驚いている様子が表れるように読む。
- 4 前は、希望をもっている様子が表れるように読み、後ろは、その希望がふくらんでいく様子が表れるように読む。

三 中学生の中山さんと木村さんは、以前に読んだ「蜘蛛の糸」は、「三」の場面が省略されていたことを思い出しました。そして、次のような会話を交わしました。

中山さん

私はこの「三」はないほうがいいと思うな。

木村さん

いや、この作品には「三」があつたほうがいいと思うよ。

あなたは、中山さん、木村さんのどちらの考えに賛成しますか。どちらか一人を選び、あなたが選んだ人の名前を解答用紙に書かれています書き出しの文の に書きなさい。そのうえで、あなたがどのように考える理由を、次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件 1 書き出しの文に続けて書くこと。

条件2 本文中の表現や内容に触れること。

条件3 八十文字以上、百二十文字以内で書くこと。（解答用紙に書かれている書き出しの文の字数を含む。）

※左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

[illegible]